

天声人語

弁護士をめざして東京大に通つていた内藤佐和子さんはある日、目が回り、足がふらつく症状に襲われた。イスに座らされて何周も回されてから立ち上がった時のように。難病「多発性硬化症」と診断された▼文学部から再受験し、法学部に入り直した直後だった。法曹の道を断念し、点滴で症状を抑えながら別の道を探す。ビジネスコンテストに応募し、故郷を活性化するアイデアを全国の学生から募る企画を実現させた。自著『難病東大生』も刊行した▼出産をへて、行政の審議会委員を務めるうち、政治への関心が強まる。国會議員らの思惑がもつれる保守分裂の状況下、徳島市長選に挑んだ▼市長選を取材した同僚によると、当初は演説にぎこちなさも目立つたが、粘り強く支持を広げ、当選を果たした。ちなみに小学校の卒業文集に寄せた言葉は「執念」だったという▼女性の市長としては史上最年少の36歳。従来の記録を5ヶ月ほど塗り替えたが、考えてみれば、男性市長ならこれほどの注目を集めなかつたのではないか。裏返せば、日本の政界がなお男性たちに支配されていることの証左とも言える▼たとえば、北欧フィンランドでは昨年暮れ、34歳の女性が首相に選ばれたが、かの国で女性首相は3人目。閣僚の過半数も女性だと聞く。首相自身、「年齢や性別は二次的なこと。大事なのは政治家として何をするか」と語っている。内藤新市長はさつく、「まちづくりがしたい」と意気込む。徳島からの新風に期待したい。

2020・4・7